

平塚柔道物語 5 2

仲間の絆

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

平成24年2月8日。新人戦の県大会個人戦が、県立武道館で開かれた。

事前に配布された対戦表から、中学2年（浜岳中）の松澤ヒデキ君は、一回戦が山場と言われていた。相手は体重120kgもある強敵であったからだ。本人は勿論、勝つことを想定し、その後の相手なども意識していたようだ。しかし、負けてしまった。松澤君は試合会場を後にすると、荷物を置いてある2階へ行き、会場の隅にうずくまるように座り込んだ。ベンチコートをはおり、フードをすっぽりかぶってうつむいているが、フードの下から涙の滴がポロポロ落ちていた。その姿を松澤君のお母さんは、じっと見つめていたのである。彼女は、なぐさめの言葉が見つからず、ただ泣き続ける息子を見守ることしか出来なかった。そのとき、応援に来ていた3年生の一人（前キャプテンの坂牛つばさ君）が、彼の横に座り語りかけた。「悔しいだろう？わかる。俺もそうだった。でも本番は今日じゃない。夏だろう。夏に全国大会に行くだろう？悔しいのはわかるけど、ここでこうして泣いている暇があったら試合会場に戻ってライバルたちの試合を見て来いよ。お前にはまだ時間があるんだよ。今自分に足りないものは何なのか？何をすべきかをよく分析して取り組めば間に合うんだから……。」松澤君のお母さんは驚いた。それはまるで真田先生のような言葉だったからだ。しかし、それでも泣き続ける松澤君の所へ、今度はもう一人の3年生（副キャプテンだった酒井勇輝君）が横に座り語りかけた。「悔しいな、でもさ、相手はお前の苦手な相四つだったろう？それでお前よりガタイが良いヤツだった。それなのに、あんな力比べしちゃったら負けるに決まってるじゃん。あの場合、お前はまだ釣り手を使って距離をとるべきだったと俺は思う。でも、これがゴールじゃない。夏までにはまだ時間があるから……。お前に足りないのは、スタミナと筋力。夏まで

にこれを必死で強化していけば、全国の舞台に立てるから！俺だって去年の大会じゃ・・・二回戦負けて悔しかったよ。悔しかったから、夏まで必死にやって、全国大会へ行くことが出来たんだ。俺に出来たんだから、お前にもきっと出来るよ。頑張れ！」と心から励ました。暖かく厳しい二人の先輩たちの激励で、松澤君はもとより、そばでじっと聞いていたお母さんも、親として、ほんとうにありがたいと心から思ったという。

二人の励ましは、限界すれすれの練習、苦闘の中で共に汗を流し、何度となく悔し涙と喜びの涙を共有した仲間だけが知る心の絆ではないだろうか。東日本大震災後の今日、絆という言葉が注目され、お互いに励まし合おう、助け合おうという心の大切さが叫ばれているが、まさに心のつながりこそが絆といえるのではないだろうか。

私は毎年、卒業式が近くなると、協会の柔道場で、卒業する生徒たちに聞く。「君たちはこの3年間、中学の柔道生活で、真田先生から何を学んだのか」と。女子も男子も必ず、「礼儀、折れない心、努力、感謝」そして「仲間の絆」と答える。それは決して口先だけでなく、体の心から出て来ている言葉である。卒業する時は、ほぼ全員が黒帯を取り、身も心もたくましく成長している。

さらに、子供を応援し続けて来た保護者の間にも強い強い絆が生まれ、これが子供たちの成長していく原動力となっているのである。



全員黒帯の3年生(浜岳中)24年3月
後列 右から2番目 坂牛君
前列 右 酒井君